

CAGLIERO¹¹

カリエロ11

サレジオ会宣教ニュース N.80 - 2015年8月

サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信



友人の皆さん

私たちはこの数週間、学校が休みに入った各地で、まさに若いボランティアたちの津波を目の当たりにしています。サレジオの宣教ボランティア活動を通して、生きることを発見あるいは再発見する若者、自分の召命さえ見いだす若者も少なくありません。実際、フランシスコ教皇は2015年世界宣教の日のメッセージで次のように述べています：「特に**若者の皆さん**に呼びかけます、皆さんは勇気あるあかし、寛大で惜みない行いをするのできる人たちです。たとえそれが社会の流れにさからうことであっても。まことの使命の理想を、誰も皆さんから奪うことがありませんように。」これこそ、ドン・ボスコが夢見る今日の若者たちです！ 最高のもの、「必要なただ一つのこと」(ルカ10・41)を手に入れるためにすべてを失う覚悟のある若者たち。限りなく広がる地平を目指す教育者、そして若者たち：この組み合わせは、勝利間違いなしです。実に、これこそサレジオの若者のボランティア活動の意味なのです！

J. Basanes

宣教顧問
ギジェルモ・バサニェス神父

福音宣教の視点から読む第27回総会

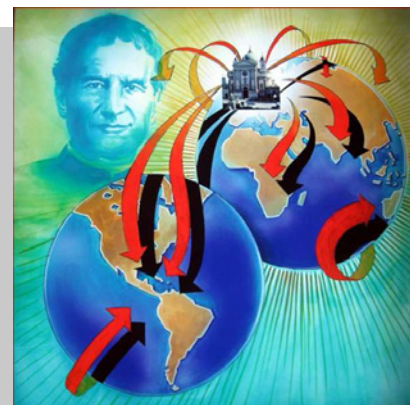
サレジオの生き方 「絶えず宣教する状態にある」

限界をもうけずに出向いて行く、扉を大きく開いた教会（『福音の喜び』20-24, 46, 210）の中の修道会として、宣教の視点から読み直すということは、すべてのサレジオ会員が人々に手を差し伸べるため[7]、そして何よりも、新たな前線や、存在の辺縁 *existential peripheries* へと出向いて行くため[22]、自らのサレジオ会召命の宣教の次元を再発見する必要があるということに集約されます。このことから、疲れ、緊張、断片化、効果を発揮できないこと、燃え尽き[27]などに表れる“自己完結”や宣教の大胆さの欠如を乗り越えるよう、求められます[2]。そのために、中流のライフスタイルのような生活から、宣教的、預言的な生き方へと移る必要があります[74.1]。そして宣教する弟子として「絶えず宣教する状態」のうちに、サレジオ会員としての生活を生きなければなりません（『福音の喜び』24, 25）。ここで、聖ヨハネ・パウロ二世の言葉が思い起こされます：「教会のあらゆる刷新は、内向きの教会となってしまうわないために、福音宣教を目標に掲げなければなりません。」（ヨハネ・パウロ二世『オセアニアの教会』19）

福音宣教をただ単に地理的にあるいは一方向的に捉えることはできないということを理解できるよう、サレジオ会員を助けることは、今日、特に重要です。福音宣教は、互いに重なり合う3つの脈絡において、すべての人への宣教 *missio ad gentes*、通常の司牧活動、あるいは新福音宣教、そのいずれが求められる場合でも、第一に、イエス・キリストを告知知らせることです（ヨハネ・パウロ二世『救い主の使命』33-34）。

プロジェクト・ヨーロッパに照らし、宣教師の多方向的な動きを理解できるようすべてのサレジオ会員を助けることが不可欠です。宣教師は、

*missio ad gentes*の実り豊かさの具体的なしるしとして、あらゆる大陸からあらゆる大陸へと派遣されます（ベネディクト十六世『アフリカの使命 *Africae Munus*』167）。この新たな状況のもと、宣教部門は、宣教のための選択を確保、調整し、導く役割を[43]、新たな前線で、存在の辺縁で、会の宣教プロジェクトの促進において、果たしつづけています[75.5]。宣教部門はこの奉仕を通して、会のために“新たな前線に立つ歩哨”となります。



宣教師が必要とされている、だから出かけて行った!



自

分の宣教召命がどのように生まれたのかわかりませんが、ごくふつうの日常生活の中でその単純ながら重要なしるしに気づき、ただそれに応えようと思いました。例えば、最も貧しい人々のうちに主に仕えるときに感じた喜び; アルバニアで、そして世界各地で働く多くの宣教師たちのすばらしいあかしなどです。私はマザー・テレサの模範にとっても触発されました。マザー・テレサは貧しく助けを必要とする人々の中でキリストの渴きを癒すために出かけて行きました。自分の召命の大きな助けになったもう一つのことは、マダガスカルでの宣教体験でした。私はマダガスカルで、最も助けを必要とする人々に仕えることを通して生涯を神にささげる宣教師の必要性がいかに大きいか、気づきました。

確かにアルバニアは宣教地であり、私たちは今も多くの宣教師を必要としています。実際、兄弟会員や友人に「宣教地に行きたい」と話すと、彼らに言われました:「気は確かか! 僕たち

はここアルバニアで始まったばかりなのに、君は行きたいのか?!」私は6人目のアルバニア人サレジオ会員で、そのうちの最初の宣教師でもあります。確かにニーズには事欠かないので、このことはちょっと不思議に思われたのです。

それでも、貧しい者が貧しい人々を助け始めなければならないと、私は心から信じています! 私たちはキリスト者として、まず自分たちの問題をすべて解決してからほかの人を助けに出かけるという考え方はできません。これまで私たちは、多くの宣教師を迎えました。今こそ、より助けを必要とする人々に自分たちの何がしかを与え始める時が来たのではないかと私は思います。行われる必要のあることに気づいたなら、人に呼ばれるまで待ってはいけなく、その必要が私を呼んでいるのだからということ、私は家族から教わりました。ですから、宣教師が必要とされているのを見て、私は出かけて行きました!

宣教師として、私はもちろん多くの困難に出遭いますが、それは乗り越えられないものではありません。このように言うのは、現実にはたくさんの困難があるからです。例えば、言葉(私の場合、いくつかの言葉-南アフリカには、私の勉強中の英語を含め11の公用語があります)、文化の違い、そして今日まで傷を残し、影響を与える歴史があります……! 時には、宣教師として自分の持っているすべてをささげているにもかかわらず植民者のように見られることがあり、とても傷つきます。でも人々が自分のことを知り始めると状況は変わります。しかしこのすべてにおいて、いつも新たに出発できるように力と喜びをください、私をなぐさめてくださるのは、主の現存と恵みです。

宣教師になることを考えているサレジオ会員に、次のことを分かち合いたいと思います: 私はいつもこう尋ねられました:「どうして呼ばれているとわかるの?」私の答えは:「とても簡単なことだよ。主に答えてみて、そうすれば主の声が聞こえるから!」聞こえることに応えようとするとは、そのことでいっぱいになるということではなく、ただそのことを真剣に考えてみるということです。私たちは、詩編39(40)にうたわれているように、惜しみなく応えなければなりません。「主よ、私はここにおります、あなたのみ旨を行うために来ました!」そして良い父親は子を呼ぶとき、子が必要とするものも与えになります……ご自分のわざが失敗に終わることを望まれないからです。それを信じますか……? 「来なさい、そうすればわかる!」(ヨハネ1:38-39)

アルバニア出身、南アフリカの宣教師
オディセ・ラズリ神学生



サレジオの宣教の聖性のあかし

私たちの父、創立者であるドン・ボスコの生誕200周年を祝いながら、ドン・ボスコが1875年に最初の宣教師たちに贈った言葉を思い起こしましょう。「あなたたちの衣食住が質素であることを世に知ってもらいなさい。そうすれば神の前に富む者となり、人びとの好意を受けることになります。互いに愛し合い、勧め合い、戒め合って、しつとや恨みの念は抱かないように。ひとりの善はみんなの善であり、ひとりの苦悩はみんなの苦悩であると考えておのおの他人の苦悩をとり除き、和らげるように努めなさい。扶助者聖マリアと聖体のイエズスへの信心を絶えず勧めなさい。会憲会則を守りなさい。毎月の『よい死の練習』をけっして忘れないこと。」



サレジオ会の宣教の意向

全サレジオ会におけるボランティア奉仕活動の成長のために

ボランティア奉仕の体験によって、若者たちが、召命と宣教の側面においても、より全人的に成長するよう助けられますように。

サレジオ青少年霊性を受け継いだものとして、ドン・ボスコ誕生の月にあたり、祈りましょう。ドン・ボスコに出会うすべての若者が、信仰の喜び、希望ある前向きな心、愛徳を帯びた宣教ボランティア活動への献身を生きるものとなりますように。

